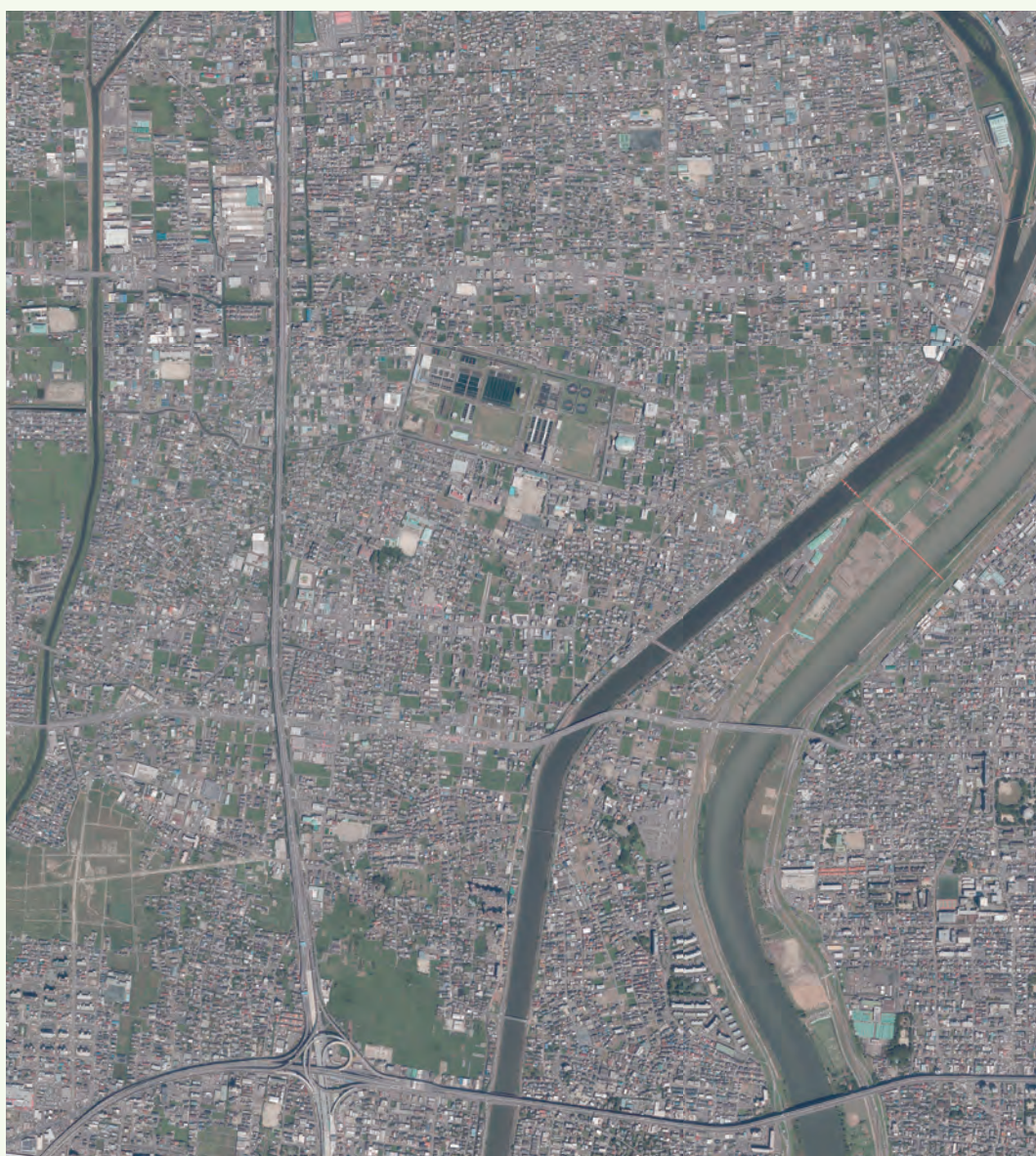


第1章

大治町のすがた



第1節 まちの風景

まちの位置と地勢

大治町は、東経 136 度 49 分 12 秒、北緯 35 度 10 分 30 秒にあり、濃尾平野の南西部に位置しています。

緯度の通過地点では、歴史ある観光地として有名なギリシャ共和国の地中海に浮かぶクレタ島とほぼ一緒になります。

地形は、岐阜県美濃地方と愛知県尾張地方、三重県北部にかけて広がる約 1,800km²の濃尾平野の木曾川デルタ（三角州）地帯の沖積層にあります。

濃尾平野は、西に伊吹山地や養老山地、鈴鹿山脈、東に尾張丘陵、南は伊勢湾に面しています。町は穏やかな低

平地に位置し、北間島やハツ屋の新川堤防付近は標高がやや高くなっていますが、町のほとんどが、海拔ゼロメートルです。

また、沖積層は、地盤が軟弱だといわれており、液状化も心配されています。

木曾三川（木曾川、長良川、揖斐川）や庄内川とその派川による肥沃な土壌は、水田の形成に適しています。

この土壌は、改善しやすい特徴があるため、田畑に適しており、町は農業地域として発展してきました。

このように河川からの恩恵を受けてきましたが、同時に氾濫に悩まされてきました。

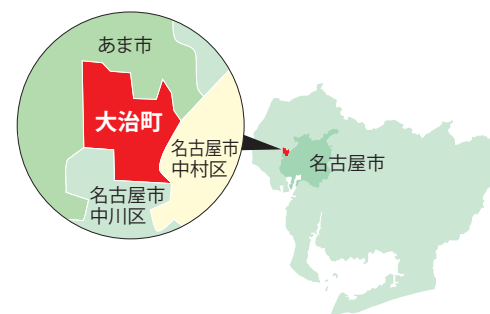


肥沃な土壌に恵まれた庄内川河川敷

図 1-1 世界地図北緯 35 度



図 1-2 町の位置



身近な河川とともに

大治町には、東側に一級河川の庄内川と新川、西側に二級河川の福田川と西條小切戸川があり、準用河川として小切戸川、円楽寺川、小糠田川があります。

庄内川は、伊勢湾（名古屋港）に注ぐ、全長 96km の中部地方を代表する都市河川です。岐阜県恵那市の夕立山（標高 727 m）を源とし、東濃地方の盆地を貫流し、岐阜県内では土岐川と呼ばれています。

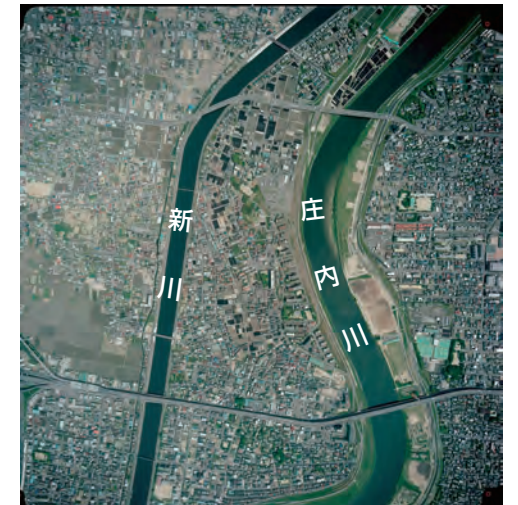
その後、濃尾平野を南下し、近隣では名古屋市、清須市、あま市を流れ、大治町を通過しています。

農業集落である稲内庄や山田庄などの内を流れる川のため、江戸時代に庄内川と呼ばれるようになったと考えられています。

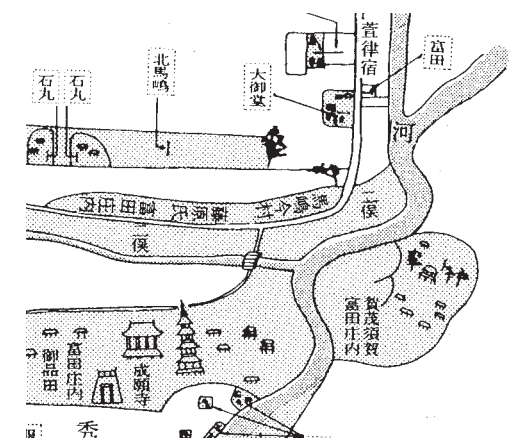
町域の流路の特色は、鎌須賀で西に大きく湾曲していることです。

直線部から曲線部にかけて、水流は直線を維持しようとするため、川面が最も高くなります。そのため増水した時には、堤防を越える危険性のある箇所です。

鎌倉時代後期～南北朝時代頃に作成されたとみられる「尾張国富田荘絵図」には、町域と周辺の地域が描かれています。東端に庄内川が流れ、「賀茂須賀」の北で大きく西に曲がり、令和の航空写真を見ても、同様に曲がっていることが分かります。



湾曲する庄内川（提供 国土地理院）



尾張国富田荘絵図トレース図（部分）

江戸時代には、庄内川に複数の河川の水が流れ込んでいたため、豪雨の際には水があふれるなどして、名古屋の城下町がたびたび被害を受けていました。

安永 8 (1779) 年 8 月の大洪水をきっかけに、庄内川から分流する人工河川が開削され、天明 7 (1787) 年に新川が完成しました。

尾張 9 代藩主徳川宗睦の藩政改革に

よりこの新川が普請され、これにより水害も大きく減少しました。

新川は、名古屋市北区と西区、北名古屋市境界の新地蔵川と新川^{あらいぜき}洗^{あら}堰^{ぜき}の合流点を源流として全長 27kmあり、庄内川のように蛇行することなく、ほぼ直線で伊勢湾まで流れています。

終戦のころまでは、庄内川もきれいで、アユやウナギなどが捕れ、その水を飲んだり、泳いだりもしました。

「昔は泳いでる時に、足をくすぐるほどアユがたくさんいた。アユは香りもよく、ウナギは太かった」「町内の円楽寺川や萱津用水でも泳いで遊んだ」とのエピソードが聞かれました。

昭和 30 ～ 40 年代になると、高度経済成長期の工業廃水や生活排水により水がかなり汚染され、白く濁って臭うようになりました。「コイ、フナ、ナマズの奇形種を見た」との回想もあります。

昭和 50 年代以降には徐々にきれいになり、最近では、下水道の整備や合併処理浄化槽の普及もあり、上流にアユも戻ってきています。

庄内川の河川敷では、戦後から町の

特産品となる赤シソの栽培が始まりました。出荷される時期には一帯が赤紫色に染まる特徴的な景観となり、初夏の風物詩となっています。

また、昭和 40 年代以降は、段ボールを敷いて堤防を滑り降りたり、家族で魚釣りやツクシを採ったりする姿も見かけるようになりました。

昭和時代の魚釣りは、ミミズなどの生き餌でフナや手長エビを釣っていました。平成になると、ルアーを使ったものが増え、シーバス（スズキ）やブラックバスを釣っている人も見かけるようになりました。

平成 26（2014）年に清須市庄内川水防センター（みずとびあ庄内）から、下流側の庄内川河川敷公園に続く 3.2km の散策路ができました。



収穫期のシソ畑

これにより、名古屋市の庄内緑地公園までを結ぶ、総延長 6.7km の散策路が完成しました。1 年を通してチューリップやマリーゴールドなど四季折々の花や、名古屋駅付近の高層ビル群の美しい眺望を楽しみながら散策できます。

福田川は、稲沢市小池辺りを上流端として、あま市と蟹江町を流れ、名古屋市港区で日光川に合流している全長 16.2km の河川です。寛政 8（1796）年に、新田を開墾するため、既存の用排水路を拡幅して整備されました。

庄内川や新川、日光川の河口部には、大治町の半分程度の面積にあたる、約 323ha の藤前干潟があり、ラムサール条約に登録されています。



庄内川散策路



福田川

町を通るそれぞれの河川がきれいになれば、もっと美しい自然環境ができるでしょう。

また平成 12（2000）～ 18（2006）年には、「おおはるエコきつず調査隊」として、子どもたちが環境学習に出かけていました。

円楽寺川や藤前干潟などの水質や生態を調査し、水辺の環境を学びました。

汚染の原因が、身近で出ている生活排水とごみによるものであることが分かり、環境への意識が高まりました。自然と共生し、環境を保全する持続可能な社会を実現していく必要があります。



多くの鳥が飛来する藤前干潟



藤前干潟で活動するエコきつず調査隊

Column 信長の川遊び

『信長公記』によれば、織田信長は吉法師時代から奇天烈な行動が多く「大うつけ」と呼ばれていました。

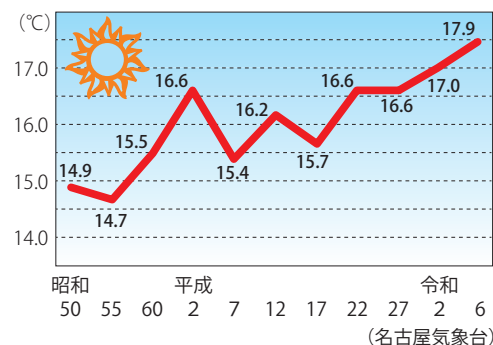
16 歳頃までの信長は、夏季によく川で鍛錬をしていたため、泳ぎが達者であったようです。時には、後に庄内

川と呼ばれるようになる川でも泳いでいたのかもしれません。

日吉丸（後の豊臣秀吉）や犬千代（後の前田利家）も泳いでいたのかもしれませんがね。

まちの気候

図 1-3 年平均気温の推移



町は、春から秋は高温多雨、冬は低温少雨で降雪もほとんどありません。

ただし、南海上から北上してくる台風の影響を受けることがあります。昭和34(1959)年の伊勢湾台風为代表されるように、多くの被害を受けてきましたが、昭和50(1975)年以降は異常気象の影響を受けて、台風などの状況も変化してきているようです。

冬季は、日本海側から関ヶ原などの山あいを通る季節風「伊吹おろし」による雪雲が流れ込み、積雪を記録しま



伊吹山

すが、昨今では、雪が全く降らない年もあります。

令和5(2023)年7月の世界の平均気温が観測史上最高になり、「地球沸騰化」といわれるほどの問題となりました。この現象は、町にも影響を及ぼしています。

昭和50年と令和6(2024)年を比較してみると、平均気温が3度上昇しており、生態系や人体への影響を懸念する時代となりました。

一例として、元来、熱帯から亜熱帯



セアカゴケグモ

地域に生息していた、毒をもつセアカゴケグモが、日本で見られるようになりました。平成7(1995)年に日本で初めて、平成17(2005)年に愛知県で初めて発見されました。その後、町でも発見されており、平成20(2008)年には、愛西市の国営木曽三川公園で、約600匹と卵が発見されるなど、日本各地で繁殖が確認されています。

生物季節観測のデータでは、春の訪れが早くなり、名古屋市での桜の開花が、この50年間で約5日早くなっています。季節外れの秋に咲く「狂い咲き」現象も起きており、100年後には2週間程度早まるとされていますが、開花しなくなることも予測されています。



西條松下緑地の桜



西條八剣社の紅葉

さらに、秋や冬の訪れが遅くなっており、カエデの紅葉が約2週間遅くなる現象も見られています。

これらは地球沸騰化の影響とされ、現在のペースで温室効果ガスが増え続けた場合、2050年には京都の紅葉の見頃がクリスマスのころになると予測されています。

まちの緑地

町はほぼ全域が市街化区域になっており、緑地として保全される「担保性のある緑地」の面積は、全体で約81haであり、全域(659ha)に占める割合は、約12.3%です。

町の自然風景は、各地区にある寺社の樹木や堤防などに代表されています。

かつては今よりも樹木も多く、数十年前までは、神社の木でカブトムシを採り、ホタルが飛ぶ様子もみられました。

「名古屋駅から車でたった15分くらいのところで、ほどよく自然が残っているのが良い」と魅力を語る町民も

Column 昔の常識、今の非常識 部活動中は、水飲み禁止?

昭和時代の中期から平成の初めごろまでは、学校の部活動中に水を飲むことを制限されていたこともありましたが。

「水を飲むと、バテる」と教えられていたそうです。

よく耐えられたものですが、夏の暑さも今ほど厳しくなかったことも事実です。





主要道路緩衝緑地帯

います。

また、農業用水路として活用される萱津井筋が、新川の右岸に沿って南流しています。この用水路は、五条川の水をあま市上萱津で取り込み、町を通り、名古屋市港区までつながっています。

しかし、住環境の向上のため、用水路にふたが被され、水辺空間がなくなり、無機質な景観となっていました。

そこで、水と親しみながら憩える場となるよう、令和4（2022）年度に水辺空間を活用した「せせらぎ水路」をつくり、遊歩道として町民に親しまれています。

名二環の名古屋西JCTの東西には、調整池（ビオトープ）があります。

ビオトープとは、身近な自然環境や



砂子せせらぎ水路の散策路



ビオトープ

景観の保全の観点から、一つの生態系をなす生物共同体の生息空間のことで、生き物たちのオアシスとなっています。

また、町で初の都市公園となる砂子防災公園を令和8（2026）年度の完成に向けて整備しており、これにより、町の緑地が増え、住環境の向上が期待されています。

まちの植生と動植物

次に、動植物の状況を見ていきましょう。

植生は、水田や畑地、寺社境内に雑木や雑草が見られ、庄内川の河川敷にはオギが群生しています。一般的な温

帯性植物の在来種に交じり、外来植物が群生していることもあり、オオキンケイギクやシチヘンゲ（ランタナ）が確認できます。これらは外来種の中で、特に生態系などへの影響が大きい生物

として、世界の侵略的外来種ワースト100に選定されています。

江戸時代には小物成（山野の草木を採取する権利に課した税）の一つ「竹役」が竹やぶの多い村に課せられ、西條村がこれに該当していました。昭和時代始めごろまで、西條に竹やぶがかなりあったといわれていますが、今では鎌須賀で少し見られる程度です。

動物は、緑地や河川、田畑などでさまざまな生き物を見つけることができます。

カナブンなどの昆虫やモロコなどの魚類、カエルなどの両生類、ヘビやトカゲなどの爬虫類、キジバトやアオサギなどの鳥類といった全国各地で見られるものが生息しています。

また、外来生物であるジャンボタニシ、ライギョ、アメリカザリガニ、ア



オオキンケイギク



アオサギ

カミミガメ、ヌートリアなどが確認できます。

しかし、昭和時代には色濃く確認できた風景のうち、アブラゼミやウシガエルの鳴き声も最近では聞かなくなりました。

電線に並んでとまるスズメや秋空を真っ赤に染めた赤トンボの群れなども少なくなりました。

田から水を引いてざるで獲って食していたウナギやドジョウ、コイなども見なくなりました。

アオサギは、川や水田でよく見かけ、カエルなどを捕食します。そのサギ類は、小魚やオタマジャクシなどを巣に運ぶときに吐き出してしまい、それが路上に散乱している不思議な光景となり、騒動になることもありました。

ヌートリアは、昭和14（1939）年にフランスから輸入され、その柔らかく上質な毛皮が軍隊の防寒着に向いているとされていました。育てやすく繁殖力も高いことから、戦時中には西日本を中心に、全国で飼育されていました。

しかし、イネや葉野菜などへの食害や在来種の生態系に与える影響、巣穴が水田のあぜや堤防を破壊する原因に



ヌートリア

もなり、侵略的外来種として認定されています。

国の環境調査では、広大な河原がある庄内川に、ギンブナやアユなどの魚やキジ、イタチなどの動物も確認されています。

また、準絶滅危惧種のメダカやカワヂシャ（植物）も確認されています。

田畑などの緑地の減少により、動植物の生息地が縮小していることは、全国的な傾向といえることができます。



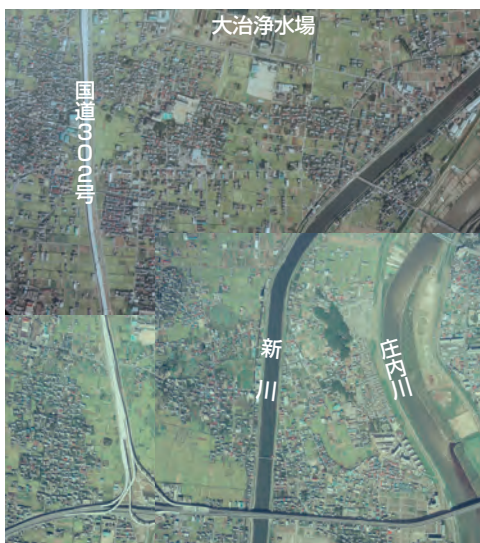
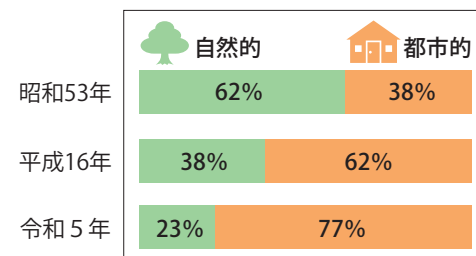
カワヂシャ

まちの土地利用

町は、農村地帯の歴史が長く続いてきたことから、農地が多くを占めていました。

昭和時代後半から都市化が進み、住宅地が拡大してきました。令和5年では、宅地などの都市的な土地利用が約8割（77%）となり、農地などの

図1-4 土地利用割合の推移

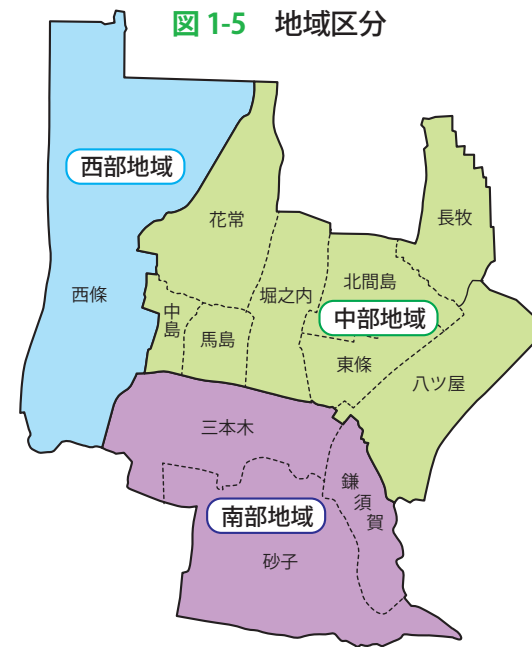


農地が広がる町域（昭和62年）
（提供 国土地理院）



宅地が広がる町域（令和2年）
（提供 国土地理院）

図1-5 地域区分



自然的な土地利用が、約2割（23%）と、大きくその差が開きました。

また、大規模なマンションのほとんどが、昭和時代後半から平成前半にかけての、バブル全盛期のころに建てられました。

ほぼ全域が市街化区域であり、近隣の名古屋市よりも地価が低かったことなどから、マンションや店舗などの開発が次々に行われていきました。同時に道路の整備も進みました。

町の土地利用の特徴を知るために、町を3つの地域に区分して、見ていきましょう。



中部地域 大治役場南交差点

中部地域は、役場をはじめとした公共施設や商業施設が集まり、中心的な役割を担う地域となっています。また、医院や歯科などが多いことも特徴的です。

南部地域は、住宅や商業の都市的な土地利用が進んでいますが、南西部にまとまった農地があり、3つの地域の中では農地の割合が最も高い特徴があります。

西部地域は、北部に工場が集積しています。また、県道79号あま愛西線や県道124号西条清須線などの主要な道路が通っており、宅地の開発が進みました。西条壱町田の苗田であったところが一気に分譲住宅となった時には、地元の人も驚きを隠せなかったようです。



南部地域 広がる農地



西部地域 福田川沿いに並ぶ工場

Column バブル(泡) 経済

バブル経済とは、経済の実力以上に株や土地の価値が泡のように膨らんだ状態のことをいいます。

昭和 62 (1987) 年のオークションで日本の企業が、ゴッホの名作「ひまわり」を当時の絵画史上最高額の約 53 億円で落札したことが有名です。

タクシーを捕まえるのに、1 万円札

を振らないと停まってくれないともいわれていました。

しかし、このバブル景気も平成 3 (1991) 年頃から後退をし始め、“泡”のごとく消えていきました。

その後の経済発展の停滞は、「失われた 30 年」ともいわれています。

Column 歴史ロマン紀行

町の一部は、平安時代以降に成立した富田荘にあり、「尾張国富田荘絵図」には「北馬嶋」「賀茂須賀」と記されており、大字馬島、北間島、鎌須賀につながる地名を見ることができます。

また、町には古くからの街並みがあり、柳街道（信長街道）や佐屋路（佐屋街道）の道筋に歴史の名残を見ることができ、のんびり歩きながら歴史のロマンも感じることができます。時代とともにその街並みは変化していますが、各地区の寺社は、江戸時代の村絵図とほぼ同じ場所にあり、今の景観に引き継がれています。

西條を南北に通る県道 124 号西条清須線は、柳の並木があったことから「柳街道」と呼ばれています。また、織田信長が 19 歳のころ、清須攻めの時に通ったとされることから「信長街道」ともいわれています。

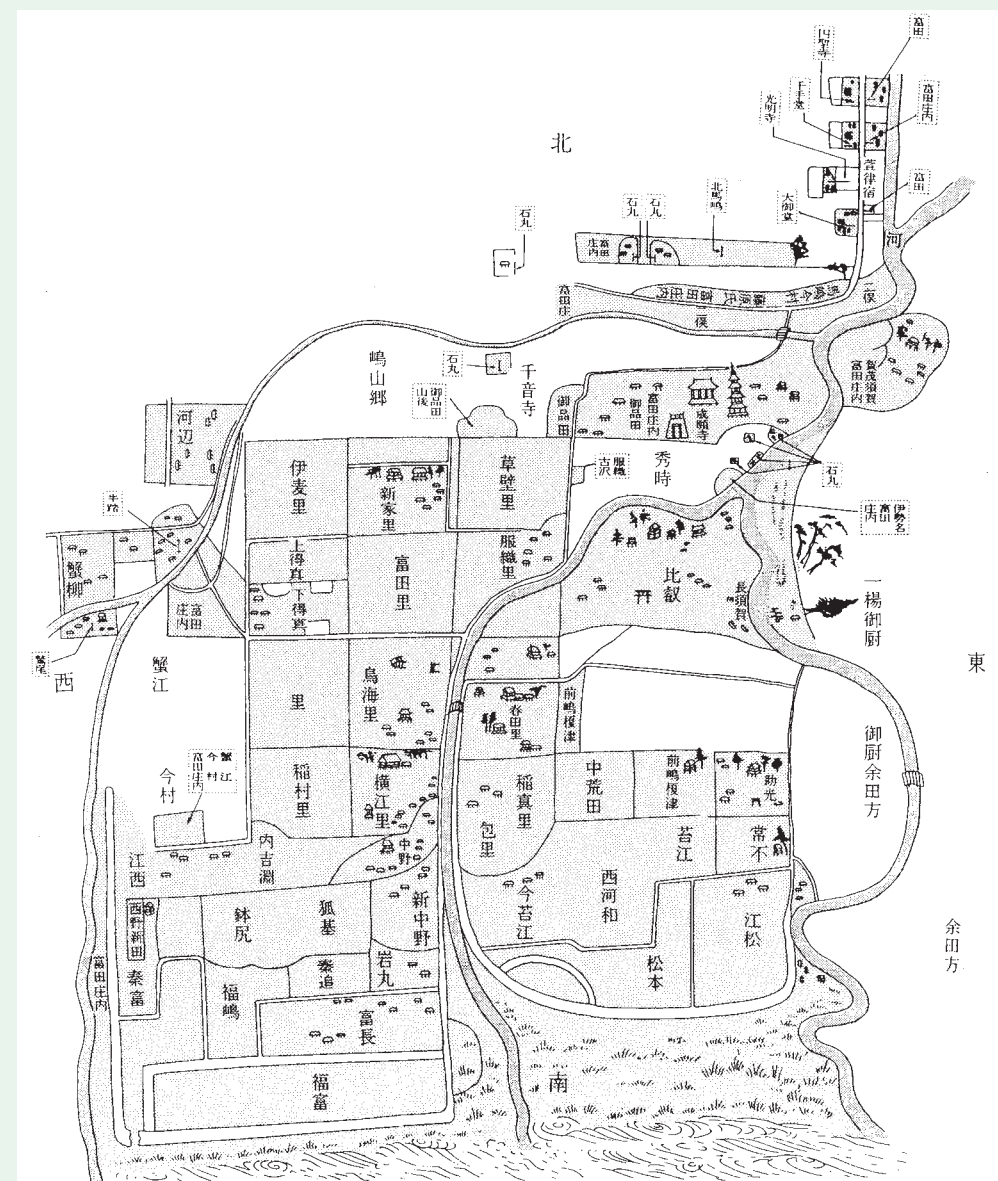


柳街道（昭和 49 年）

蟹江町須成の善敬寺から、あま市七宝町徳実・伊福・桂、大治町西條、あま市甚目寺を通り、清須市清洲へと続いています。

この街道筋には寺社があり、集落の地割を複雑にするなど、敵からの侵入を防御する機能を備えた地でもありました。

砂子を通る佐屋路は、江戸時代の寛永 11 (1634) 年に東海道の脇往還として整備され、宮宿（熱田宿、現名古屋市熱田区）から桑名宿（現三重県桑名市）に至る伊勢湾の海路（七里の渡



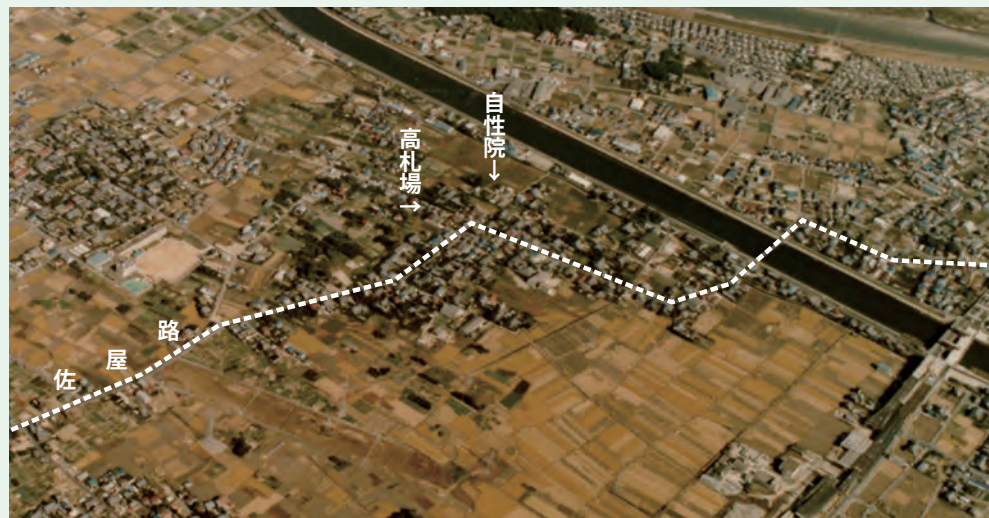
尾張国富田荘絵図トレース図



柳街道（平成 3 年）



江戸時代の佐屋路（「佐屋路分間延絵図」）（部分）（提供 東京国立博物館）



江戸時代そのままの佐屋路の道筋が残る（昭和57年）

し）の迂回路として、安全性を確保するため盛んに利用されました。佐屋路沿いに松が植えられており、別名を「松街道」と呼んでいたそうです。

岩塚宿から庄内川の渡船（万場の渡し）により万場宿、神守宿、佐屋宿を通り、川船による三里の渡しで桑名宿まで結び、東海道佐屋廻りとも呼ばれました。

宮宿から西に向かって町域に入る

と、庄内川と新川を渡って、北に上がり、西に曲がる辻に高札場がありました。その東には自性院があります。この位置関係は、江戸時代から変わっていません。

西條や砂子と同様にほかの地区も、江戸時代には今の地割の原形ができていたと考えることができます。

昔を想像して、頭の中でタイムスリップしてみたいかがでしょうか。

第2節 まちの人々

社会の変化とまちの人口のうつりかわり

昭和35（1960）年の町の人口は6,455人、世帯数は1,293戸でした。

昭和39（1964）年に東海道新幹線が開通し、東京オリンピックが開かれました。

翌年には、名神高速道路が全線開通したことなどにより、日本経済は右肩上がりで成長し、経済活動の活発化とともに人やモノの流れが増大していきました。

こうした高度経済成長期に、町の人口が1万人を超え、昭和50（1975）年には1万7,690人、4,756世帯と、わずか15年間で人口は約3倍、世帯は約4倍に膨れ上がりました。

平成27（2015）年には人口が3万人を超え、令和2（2020）年まで1年に約330人の増で推移し、人口3万2,399人、1万3,468世帯となりました。

町民からは、「交通の便が良い」や「名古屋に比べて土地が安い」といった声が聞かれます。また、「自然がほどよく残っている」との意見もあります。

このように、名古屋市に近いわりに、住宅の購入価格や家賃も手頃で住みやすいことから、若い世代を中心に転入者が増えたことが要因であると考えられます。

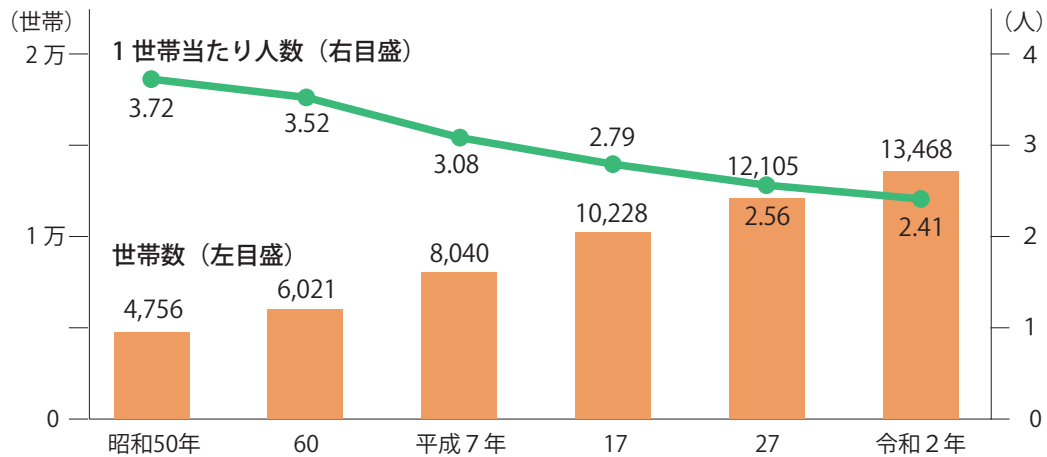
また、核家族や外国人も含めた単身世帯が多くなり、世帯の規模は年々小さくなっています。

愛知県の人口は、平成27年から令和2年で0.8%増加しましたが、昭和25（1950）年以降で、過去最低の伸び率となりました。その中でも、町の増加率は4.5%で、県内で幸田町に次いで第2位となっており、人口密度も名古屋市に次いで第2位となっています。

表1-1 町の人口等の推移（国勢調査）

年	人口（人）	世帯数（世帯）	人口密度（人／km ² ）
昭和50年	17,690	4,756	2,560.1
昭和55年	19,939	5,447	2,885.5
昭和60年	21,171	6,021	3,063.8
平成2年	22,598	6,810	3,434.3
平成7年	24,724	8,040	3,757.4
平成12年	27,073	9,320	4,114.4
平成17年	28,501	10,228	4,331.5
平成22年	29,891	11,285	4,535.8
平成27年	30,990	12,105	4,702.6
令和2年	32,399	13,468	4,916.4

図 1-6 世帯数と 1 世帯当たり人数の推移



外国人も平成 24 (2012) 年からの 10 年間で倍以上となり、1,000 人を超えています。なお、登録者数の多い国は、ベトナム、中国、フィリピンの順となっています。

人口を年齢 3 区分別に見ると、14 歳以下の年少人口の割合は減少し、65 歳以上の老年人口の割合が増加しています。全国の状況と同様に、少子高齢化に向かっています。しかし、県

の年少人口が 13.0% で、町は 2.2 ポイント高く、老年人口では県が 25.3% で町は 4 ポイント低くなっています。ここから、町には若い世代が比較的に多いことが分かります。

また、平成 30 (2018) 年から令和 4 (2022) 年の合計特殊出生率は 1.58 で、全国の平均が 1.33 であることから、出生数の多さが分かります。

表 1-2 外国人国別人数の推移

■平成 24 年 10 月

国名	人数
韓国	190
中国	88
フィリピン	76
ブラジル	18
ベトナム	15
トルコ	9
その他	45
計	441

■令和 6 年 12 月

国名	人数
ベトナム	226
中国	205
フィリピン	198
韓国	165
ブラジル	100
トルコ	69
その他	177
計	1,140

図 1-7 年齢階層別人口の推移

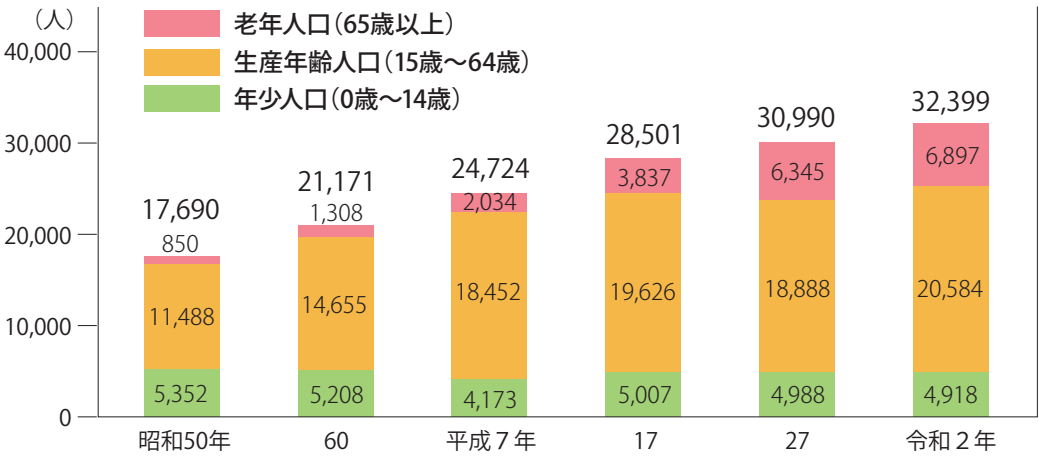


図 1-8 年齢階層別人口割合の推移

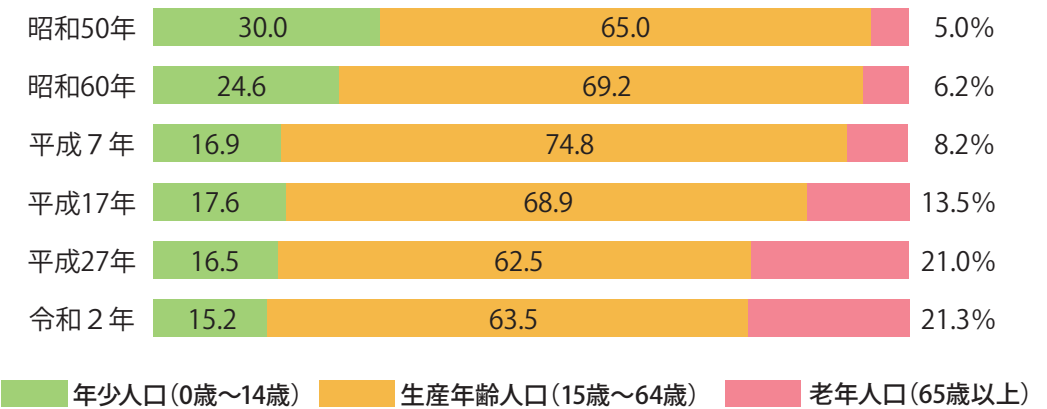
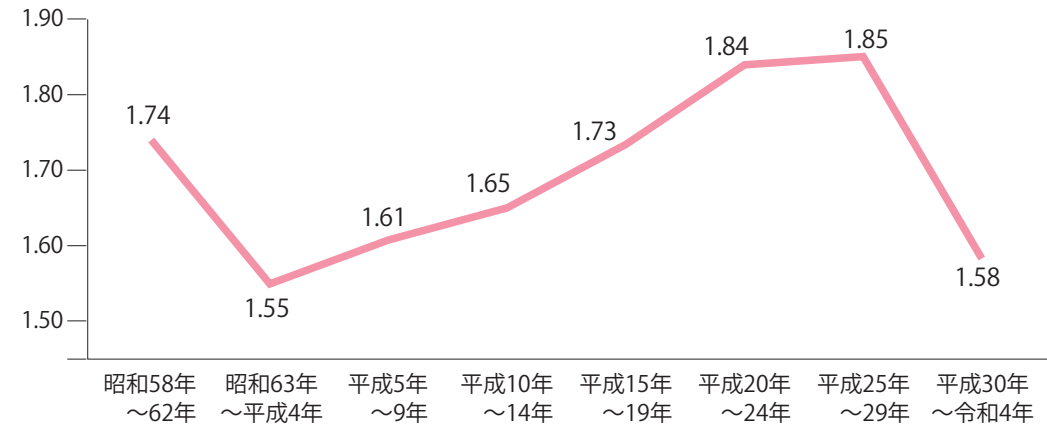


図 1-9 合計特殊出生率の推移



人口 33,333 人の記念事業

町の人口は令和 2 年に 32,000 人を
超え、その後も増加しており、33,333
人の到達を祝う行事を計画しました。

到達が間近になると、「いつ、誰が
その節目の町民になるのか」と、話題

にのぼるようになり
ました。そして、令和
4 年 11 月 18 日 に
33,333 人に到達しま
した。その節目の町
民になったのは、仲
の良いご家族に誕生
した男の子でした。

12 月 24 日に役場で
記念証や記念品を贈
呈しました。ご両親

からは、「家族みんな驚きとともに、
喜びでいっぱいです。33,333 人目と
いう運を味方につけて、輝かしい未来
に向かって元気に育ててほしいです」
との話がありました。



はるちゃんと一緒に記念撮影

未来に向かっての施策

少子高齢化が進むなかで、日本全体
や地方の人口減少に歯止めをかける必
要がでてきました。それぞれの地域で
出産・子育てがしやすい環境づくり、魅力的
な地域づくりを目指し
て、法律がつくられま
した。また、2060 年
には人口を 1 億人とす
る目標の実現に向け
て、「まち・ひと・し
ごと創生長期ビジョ
ン」が定められました。

町も平成 28 (2016)

年に人口ビジョンと総合戦略を定め、
人口の増加と確保に取り組んでいます。



休日を公園で過ごす家族